
うしろ

真弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うしろ

【Nコード】

N4835T

【作者名】

真弥

【あらすじ】

恐怖はいつだってうしろからやってくる。人間の絶対的な死角から。

七人の主人公による恐怖体験が、今から始まる。

以前載せた『うしろ』の再編集です。

以前よりは読みやすくなっていると思います。

■六反田健の場合■

「おう、上がれよ」

六反田健は、大学の友人である香山永一を家に招きいれた。

今日は日曜日で、健も永一も講義が無い。

昼過ぎに、健が永一をある理由があつて呼んだのだった。

六畳ほどの小さな部屋に、健は一人暮らしをしていた。

部屋は漫画や大学で配られたプリントが散乱していて足の踏み場も無い。

唯一スペースが開いているのは、二人掛けのソファアとベッドの上くらいだ。

ソファアの前にはテーブルがあり、その上にパソコンが乗っている。

パソコンの周りも飲みかけのペットボトルやカップラーメンの器など置かれていて汚い。

健の部屋に何度も訪れている永一には見慣れた環境だった。

「何だよ、見せたいものがあるって」

「いいからいいから」

そう言って、健はパソコンの電源を入れた。

永一はソファに腰をかけると、ゆっくりと起動音を上げるパソコンのモニターを眺めていた。

健はというと、ソファとテーブルの間に出来た狭いスペースの床に腰を掛け、パソコンが立ち上がるのを不敵な笑みで待っている。

暫くすると、モニターには健の好きなアニメの画像が映し出された。

画像の前に並ぶアイコンの一つをクリックすると、スピーカーから声が聞こえてきた。

『いえーい。今日は三人で卒業旅行に来てまーす』

健の明るい声が聞こえた。それを聞いて永一は健を見た。健は楽しそうに笑って永一の顔を窺っている。

「これって、先週行った旅行の？」

永一が驚いた表情をしながら、体を乗り出してモニターを見つめた。

永一の言うように、パソコンに映し出された映像は、先週、健と永一、それにここにはいないが、同じ大学の友人の佐々木浩介の三人で卒業旅行へ行った時の映像だ。

三人は大学で知り合ったのだが、大学一年の頃から学科が同じで、

いつも三人で行動していた。

とても仲が良く、クラスで『仲良しトリオ』と呆れられるほどだった。

「そういえば、カメラで撮ってたもんなあ」

永一が呟いた。

モニターの中では、新幹線の中で楽しそうにしている永一と浩介の顔が映っていた。

撮っているのは健で、二人の行動にナレーションをつけて楽しんでいる。

「うわあ、馬鹿なことしてるなあ俺達」

永一が笑って呟いた。映像は目まぐるしく様々な場所や物を映し出していく。

それらを見て、健と永一は声を上げて笑ったり思い出を語ったりしていた。

「本当は浩介も呼んだんだけどさ、全然連絡取れなくてさ」

健が不機嫌そうにそう言った。永一も同じ顔で携帯を見つめた。

「俺も連絡取れないな……まあそのうち連絡あるだろ」

そう言って、永一は携帯電話を閉じ、モニターに目を戻した。

どれほどの時間、旅の映像を見ていただろうか。

映像には駅の中に入って行く永一と浩介がこちらに向かって手を振っていた。

最終日、健は一人残った。この映像は帰る二人を見送っている所だ。

「そう言えば、この後お前どこ行っただの？ 何か行きたい所あるって言っただけ」

永一が不思議そうに質問した。

「あ、この後映像あるよ」

健が説明した。暫くすると、辺り一面に海が映った。

潮の流れも荒く、風の音も激しく聞こえる。

ゆっくり映像が動くと、そこが崖の上から撮っている映像だとわかる。

「崖？」

「そう。何でもさドラマの撮影でも使われてたりしてるし、自殺者も多いとか、有名な場所らしいんだ」

映像は、ただ崖の上から写す物だった。暫く辺りを写して映像が止まった。

「あれ？」

健が呟いた。慌てて映像を巻き戻した。映像が遠くの崖を映している。モニターの端で何かが動いた。

人がいる。それも二人。健はモニターに顔を近づける。

しっかりは見えないが、何となくシルエットが確認できる。

「あー!!」

一人がもう一人を後ろから押した。押された人影は崖の下へ消えていった。

健は思わず口を手で押さえた。あまりにも恐ろしい映像に言葉が出なかった。

「永一、今の見た？ やばい映像が映ってるよ……」

永一は無言だった。健と同じく表情が硬い。

映像の中では人を突き落とした人間がこちらに気が付いてじっと見ているのがわかった。

映像を巻き戻し、健は再度映像を見た。

何度も見ていくうちに、風に紛れて人の声が聞こえてくる。

健は慌てて音量を上げた。風の音も大きくなったが、これで人の

声が聞こえやすくなるはずだ。

『やめろ！』

突き落とされる瞬間、叫び声が聞こえた。

本当に小さな声だが、確かに聞こえる。健は寒気がした。その声は知っている。

その声の主は浩介だ。

「お前だったのか」

背後から低い声が聞こえた。恐る恐る振り向くと、永一がナイフを握っている。

そのナイフを健の背中目掛けて振り落とした。

ナイフの刃が、深く健の背中に突き刺さった。

「実はあの後お前を追って二人でここに来たんだ。でも途中、些細な事で口論になってさ。だから浩介を突き落としてやったんだよ。こんな映像撮っていなければ、お前は死ななくて済んだのにな」

薄れ行く意識の中、健は永一の高笑いを聞いた。

■柴田信弘の場合■

今日、柴田信弘のクラスでは席替えが行われた。

二ヶ月に一度行われるこのイベントは、信弘たち中学生にとっては、死活問題にもなりえる重要なイベントである。

そんな大袈裟なと思われるかもしれないが、一ヶ月間嫌いな友人と近くの席になっただけで学校へ行きたくなる事もありえるし、好きな人が隣の席になったとあれば、毎日が至福な日々となる事だつてある。

青春時代真っ只中の中学生にとってそれほど重要なのだ。

信弘のクラスではくじ引きで行われる。

黒板に席順を書き、そこに数字が書かれていて、くじで引いた番号の場所が新しい席となる。

信弘のクラス担任が一年間で多くの友人達と親しくなるようにと、このランダムルールが設けられたのだった。

信弘も仲の良い友人と近くの席になることを祈りながらくじを引き、自分の新しい席を確認して絶望した。

席替えにより、信弘の後ろの席になった人物は、佐藤雅史。

彼は信弘の学校で有名ないじめられっ子だった。

。雅史にはあだ名があった。雅史に与えられた通り名は『トンネル』。理由は彼の顔にあった。

雅史の鼻の穴は異様に大きかった。

顔の約10%を鼻の穴で占めているとの噂もあるほど大きかった。

ただ彼が命名されたのはそれが原因ではない。ある出来事が起きたからだ。

その出来事が起きる前は、まだ雅史はいじめられる人物ではなかった……。

「みんな見ろよ！ これトンネルみたいじゃない？」

ある日の放課後、クラスの友人が叫んだ。彼は黒板の横に張られた写真を指差していた。

教室にいたクラスメイト全員が写真に注目した。

黒板の横の壁には一人一人の顔写真が並んでいるのだが、雅史の写真だけが異様だった。

雅史の鼻の穴の部分が針のようなもので穴を開けられ、背後の壁紙が見えていた。

きっと誰かがいたずらしたのだろう。それを見て、多くのクラスメイトが笑い出した。

雅史は自分の事で笑われていたのはわかっていたと思うが、無言

だった。

もともと暗い性格で、彼の声を聞くことは滅多にないほど静かな男子だった。

「おいトンネル！ 何か言えよ！」

クラスの男子が雅史に向かって言い放った。笑い声が教室を包む。

「やめなよ！ 可哀相じゃん」

女子一人が言った。ただ彼女も笑っていた。多分雅史の味方はそこにはいなかった。

暫く笑い声が教室を包んだ。雅史を囲むように多くのクラスメイトが雅史を嘲笑っていた。

雅史は何も言わずに立ち上がると、クラスメイトの間を通り抜け、その日は教室に戻って来る事は無かった。

その出来事から、雅史はトンネルになった。

誰かの些細ないたずらの生贄となった彼は、クラスではいじめられる存在となった。

そんな彼が後ろの席で、信弘が楽しいはずはなかった。

信弘の気持ちとは裏腹に授業が始まった。席替えをして最初の授業だった。英語の授業だ。

教室に入ってきた英語教師が変わったクラスの配置を見て、何か言っている。

しかし信弘にはそんな事どうでもいい事だった。

信弘は退屈そうに教科書を眺めていた。

教師が教科書の文章を読みながら、クラスを回る。

静かな教室に、教師の声だけが聞こえる。

きつと教科書を流暢な英語で呼んでいるんだろうが、今の信弘の耳には届かない。

早く授業が終わってくれ。信弘は心の中で祈った。

休み時間になってから仲の良い友人の所へ行き、現在の自分の鬱憤を聞いてほしい。

信弘はそう思っていた。

「ポツ、ポツ」

ふと気が付くと信弘の耳に、そんな音が聞こえた。

何の音か信弘にはわからなかった。

錯覚か？ 信弘は思った。

「ポツ、ポツ」

まただ。また同じ音が聞こえた。

何かが当たる音？ いや、そうではない。何かが破れる音？

それも違う。とにかく何の音がわからない。

そして信弘は気が付いた。音は後ろから聞こえる。雅史が何かをやっているんだ。

「ポツ、ポツ」

信弘はその音が気になって仕方がなかった。

聞き覚えのある音にも聞こえた。でもわからなかった。

音の正体は未だわからないのだが、何か気持ち悪いイメージが信弘の脳裏を過ぎった。

どこかで聞いたことがある。でもわからない。

そんなモヤモヤとした心境が、一層恐怖を煽った。一体、雅史は何をやっているのだろうか。

信弘は頭を動かすことなく左右を見回した。

真剣に教科書を読んでいる者。

机の下で隠れて携帯電話をいじっている者。

教師が通り過ぎた途端後ろの席の友人と密かに話をする者。

多くのクラスメイトがその教室に存在する。

しかしその音に気が付いているのは、どうやら信弘しかないようだ。

いや、そういう説明をすると語弊がある。その音が気になっている人物が信弘だけなのである。

「ポツ、ポツ」

もはや、教師の声など信弘の鼓膜を揺らす事は無かった。

信弘はもう我慢が出来なくなっていた。音の正体が気になって仕方なかった。

もう我慢できない。信弘は覚悟を決めて、振り向いた。

「……!？」

そして啞然とした。

「ポツ、ポツ」

雅史は信弘の顔写真に画鋏で穴を開けていた。

顔中に無数の穴が開いていた。

信弘の視線に気が付くと、雅史は手を止め、ゆっくり顔を上げて

信弘と目が合った。

そして、雅史不敵な笑みを浮かべた。

トンネル事件の犯人が誰なのか。

この二人だけは知っていた。

■梅田仁の場合■

「いけない！ 寝坊だ！」

携帯の時間表示を見て、梅田仁はベッドから飛び起きた。

今日は彼にとって遅れる事が出来ない重要な日だった。

自分の部屋から出ると、リビングに向かった。

今日は日曜で家族は誰もいない。仁本人も今日は大学の講義が休みだった。

「着替えてる暇もないよ」

仁は部屋の壁に掛かっている時計を見て呟いた。

今仁が着ているのはパジャマ代わりに着ているＴシャツとジャージだ。

本来ならしっかりとした服装に着替える必要があるのだが、仕方が無い。

仁は財布や携帯電話を持ち、家を出た。

走りながら、仁は携帯電話の画面を開き、安本と書かれた人物に電話を掛け始めた。

「もしもし、お前何やってるんだよ」

電話に出るなり、電話の向こうからそう聞こえた。

安本一真、仁の高校時代からの友人で、今も学科は違うものの、同じ大学に在学していた。

「ごめん、寝坊した！」

「馬鹿じゃないの？ もうジョン来てるぞ」

一真が言った。ジョンと言うのは、アメリカからの留学生で、一真の友人だった。

一真は英文学科に在籍していて、その関係で出会ったらしい。

今日仁は一真に彼を紹介してもらう事になっていた。

「ごめん！ 今向かってるよ。あと少しで着くから」

そう言って、仁は携帯をポケットに閉まった。

仁が家を出て10分程で、一真との待ち合わせ場所であるファミレスに辿り着いた。

お昼時と言う事もあり、店内は混んでいた。

仁は店内を見渡し一真の姿を確認した。そして窓側の席に座る一真を見つけた。

一真も仁を見つけたらしく、目の前に座る男性に一言声を掛け、

仁に近付いてきた。

「お前！ 遅いぞ！」

「ごめん！」

仁は両手の掌を合わせ、顔の前に持つてきた。

一真は仁のその行動を見て、大きな溜息を吐いた。

「もういいよ……それより、この前言った事覚えてるだろうな？」

一真が言った。仁は二日前に一真と話した会話を思い出した。

今日仁が一真に紹介してもらったジョンと言う男性は、普段はとても温厚で、優しい男性だが、愛国心が強く、自分の祖国アメリカを愚弄するような事を言ったり、表現されたりする者に対しては、怒りを露にするらしい。

一真の話だと、一度ふざけてジョンの前でアメリカの事を馬鹿にした同じ大学の学生が、ジョンに怒りの鉄拳を受け、入院したらしい。

その話を思い出した仁は、一真の顔を見て、深く頷いた。

仁が一真に頼んでジョンというアメリカの留学生を紹介してもらうのには理由があった。

仁は昔から海外、特にアメリカへ旅行するのが夢だった。

まずはアメリカの友人を作り、少しずつ夢を現実のものとしていきたい……という名目だった。

本当の理由とは、外国の友人がいるというちょっとした優越感を味わいたいという、くだらない理由だった。

その事は一真も知らない事実である。

「とにかく行くぞ」

一真はそう言うと、さっきまで座っていた席に向かって歩き出した。

仁は一真の後を追った。

「ジョン」

一真が椅子に座った男性に声を掛けた。

振り向いた男性・ジョンは笑顔で立ち上がり、仁に向かって握手を求めた。

一真がジョンに英語で仁の紹介をし、仁は続けておぼつかない英語で自己紹介をした。

ジョンは終始笑顔で話を聞いた。

互いの自己紹介も終わり、一真と仁は窓側の席に、ジョンはそのまま通路側の席に座った。

そこから三人はいろいろな話で盛り上がった。

基本、ジョンは日本語で話をしてくれた。

たまに仁へ伝わらない事があると、英語で話をし、一真が仁へ通訳する形になった。

仁は自分がアメリカが好きだと大袈裟に思える程熱く語り、ジョンも喜んで仁の話に耳を傾けた。

楽しい時間はあっという間に過ぎていった。

約一時間程話をした所で、ジョンが帰宅する時間になった。

ジョンと仁は互いの連絡先を交換すると、握手を交わし、ジョンが帰っていくのを立ち上がって見送った。

「ふう……」

ジョンが店を出るのを確認した後、仁はその場に座り深い溜息をした。

緊張もしたせいか、やけに体がだるく感じる。

「お前、俺に感謝しろよ？」

一真が言った。

「わかってるって。今日夕飯奢るからさ」

とにかく、今日は一真のお陰で、仁はジョンと仲良くできた。仁は本当に感謝していた。

「っていうか俺さ、ずっと言いたかったんだけど、お前の服、後ろ前じゃないか？」

一真が仁の服を見てそう言った。その言葉に驚いた仁は、自分の服を見た。

確かに一真の言うように、仁の着ているＴシャツは前後逆さになっている。

その証拠に、顎の下辺りに、服のサイズが記入されたタグが見える。

「寝坊して慌てて家を飛び出してきたから」

一真は笑いながら、仁の服の前後を見回した。

仁の背中に目をやった一真は暫く視線を一箇所留め、真剣な表情になった。

「お前……危なかったぞ」

一真は呟いた。

「何が？」

「お前、運良すぎだよ……もしこの服しっかり着てたら、お前ジョンに殺されてたぞ」

一真の恐ろしい言葉に、仁は眉間に皺を寄せた。背中に何が書いてあるんだと言っののだろうか。

仁は慌てて背中を見ようとした。今すぐここでＴシャツを脱ごうとしたが、そうはいかない。

仁は窓に反射させ、自分の背中にかかれたデザインを確認した。

そこには、明らかにアメリカを皮肉った英単語が書かれていた。

多分、少しでも英語をかじった人物ならこの英単語の意味がわかるだろう。

その文字を確認した仁は血の気が引くを感じた。

「危ねえ……」

恐怖のせい、仁の口角が上に上がった。少しずつ笑い出し始めた。

「やばいよ、危なかった！ マジ良かったよ！ 俺、こんなん着てきちゃったのかよ！ 死ぬところだった！」

恐怖が安心に変わった時には、笑いが止まらなくなっていた。

安堵の笑いは、暫く続いた。

よく外国人が意味も知らずに変な漢字の書かれた服を着ていることがある。

日本人は同じように意味も知らずに、デザインだけで英語の書かれたTシャツを買ってしまう。

仁もそのタイプの人間だった。

今来ている服も、今この時まで意味も考えず着ていた。

それを運良く後ろ前に着ていたお陰で助かった。

仁は何度も何度も、ガラスに映る英単語を見て、笑い声を抑えた。

「仁……おい……」

一真が呟いた。仁が一真の顔を見ると、青ざめ表情でガラスに映った字を見ている。

仁は首を傾げながらガラスに視線を戻した。

文字に目をやったが、さっきと同じ映像が映っているだけだった。

だが、少しずつ仁の目の中のピントがずれていき、ガラスの先の風景が目映った。

窓の向こうで、愛国者のアメリカ人が、じっと仁の顔を見ていた。

■野田悠美の場合■

「ねえ知ってる？」

ある女子生徒が友人に言った。

「体育館裏に咲いている桜の木の下で好きな人に告白すると、絶対両思いになるんだって」

こんな噂話は、どこの高校でも大なり小なり存在する。

誰が創ったのか。真実か嘘か、高校生にとってそんな事はどうでも良かった。

ただ高校生は噂話に興味を持ち、それを日常の会話で楽しむだけだった。

実際に学中にその噂話の真偽を調査しようとする学生などゼロに等しいだろう。

ただ、ゼロではない。中にはその噂話を立証しようとする学生もいる。

朝、学校に通学してきた生徒達が、それぞれの教室に向かい、廊下を歩いていく。

生徒達の賑やかな声が、その日一日の始まりを告げていた。

「栄太君……」

廊下を歩いていた高校二年の男子生徒、篠原栄太に、野田悠美は声を掛けた。

「おはよう。どうしたの？」

栄太は立ち止まり、悠美の顔を見た。

悠美は目を下に向けながら何か言いたげだった。暫くの沈黙の後、悠美は言葉を発した。

「今日の放課後……話したい事があるんだけど……」

栄太は少し考えた。悠美は未だに視線を下けている。

「いいよ。今日は部活もないし。どこで話す？」

栄太が答えると、初めて悠美は顔をあげた。少し照れたような表情で、場所を指定した。

「じゃあ、体育館裏の桜の木の中で……」

「わかった。じゃあ放課後ね」

そう言って、栄太は自分の教室に消えていった。

暫くその場で立ち止まっていた悠美も、栄太の入っていった教室に入っていた。

栄太と悠美は一年、二年と同じクラスだった。

栄太はサッカー部に所属していた。明るい性格で誰にでも好かれる生徒だった。

とてもモテる……というわけではないが、一部の生徒から人気があった。

対照的に悠美は文芸部で、物静かな性格だった。

目立つ存在ではない為か、友人も少なく、休み時間でも一人で小説を読んでいる事が多かった。

二人の共通点は、クラスメイトというだけではなかった。

高校一年の時、委員会が一緒に、二人は図書委員会に属していた。

毎週月曜日の放課後図書室で、書物の整理や生徒への本の貸し出しなどをする仕事を一緒にやっていた。

元々本が好きだった悠美は本の知識が多く、それに興味を持った栄太が悠美に話をするようになり、そこから二人は仲が良くなったのだ。

悠美に対しても明るく接する栄太の優しさに、悠美は少しずつ好意を抱き始めていた。

そして今日、悠美は一大決心をするべく、栄太を放課後に呼び出す事にしたのだ。

別に悠美は噂を信じているわけではなかった。立証しようと思っ
ていなかった。

でも、その噂話はとても気になっていた。悠美は桜の木の下で栄
太に告白し、付き合いたいと本気で思っていた。

その日の放課後、栄太は悠美に言われた通り、体育館裏の桜の木
の下で悠美を待っていた。

時刻は午後五時。空は薄っすらと暗くなり始めていた。

「栄太君……」

体育館横から悠美が姿を現した。恥ずかしそうに栄太の下に歩み
寄ってくる。

「こんな所に呼び出しちゃってごめんね」

「全然いいよ。話って何？」

栄太は木に寄り掛かるようにして悠美を見た。悠美はまた顔を俯
かせ、言葉を選んでいた。

「あのね……私……栄太君が……好きになったみたい」

悠美は言葉を発した後、顔を真っ赤にした。栄太は悠美の告白に
驚き、暫く沈黙した。

「あのさ……私と付き合って……くれないかな」

悠美が続けた。悠美は生まれて初めての告白に、胸がはちきれそうな感覚に襲われた。

次に返ってくる栄太の言葉が怖くて。そのまま倒れてしまうのではないかと思うほどだった。

「……ありがとう。凄く嬉しいよ」

栄太の言葉を聞き、悠美はゆっくり顔を上げた。

目の前には自分の大好きな栄太がいる。

悠美は自分の身体が震えているのを感じながら、栄太の言葉を待った。

「……ただ、ごめん。付き合うことは出来ない」

栄太が申し訳無さそうに言った。悠美は無表情になった。

「本当に悠美の気持ちは嬉しいんだ。でもごめん。俺、好きな人いるんだ」

栄太はそう言って、頭を下げた。それが栄太の精一杯の気持ちだった。

悠美は栄太の言葉を聞いても、何も言葉を発しなかった。

「ごめん。本当に嬉しいんだ。でも悠美とは今までみたいに友達でいたいな……自分勝手だよ」

栄太はそう言って、顔を上げた。

悠美の顔を見ると、あまりにショックだったのか、目の焦点が定まっていなかったように見えた。

「嫌だ」

悠美がそう一言呟いた。

栄太は今までに聞いたことがない悠美の低い声に、少し恐怖を感じた。

「嫌だよ。私、栄太君の事が好きなの。誰よりも好きなの。ほら、これ見て」

悠美はポケットから携帯電話を取り出しボタンで操作した後、液晶画面を栄太に見せた。

画面に映った画像を見て、栄太は背筋を凍らせた。

携帯電話には栄太の写真が映し出されていた。

それは、栄太の目に覚えのない写真だった。

「ほら。私、栄太君をずっと見てるんだよ。ほら、これだって」

悠美がボタンを押すたび、別の映像が映し出される。

どれも栄太には記憶にない写真だった。全て栄太の知らないうち

に撮られた、盗撮画像だった。

「ほら、ほら、見て」

何枚も何枚も写真が変わって映し出される。

学校の中での写真。

部活中の写真。

委員会の際の写真。

「ほら、ほら、ほら」

「や……やめろ……」

電車の中での写真。

買い物中の写真。

友達と遊んでいる写真。

「ほら、ほら、ほら」

「やめてくれ……」

帰宅中の写真。

家族と夕飯を食べている写真。

寝顔の写真。

「やめろ!!」

栄太は叫んだ。

悠美は驚いて、指を止めた。なぜ栄太が怒鳴ったのか、わからないといった表情だった。

「もう、俺に近付かなくてくれ!!」

栄太はそう言い放ち、腕で悠美を突き飛ばした。

悠美を暫く睨みつけた後、栄太は悠美から目を逸らし、歩き始めた。

「どうして？ どうして？ 待つて。 栄太君。 私はこんなに栄太君が好きなんだよ？ 待つて。 待つて」

悠美のどんな言葉にも栄太は反応しなかった。

いや、出来なかった。栄太は怖かった、悠美の行動が全て怖かった。

[illegible]

悠美の声が後ろから聞こえた。栄太は振り向かなかった。

だが声が近くなってきたのはわかった。

「ねえ知ってる？」

ある女子生徒が友人に言った。

「体育館裏に咲いている桜の木の下に、殺された男子生徒の死体が埋まっているんだって」

■高井田元気の場合■

高井田元気はほろ酔い加減で、道を歩いていた。

今日は中学時代の同窓会で、最後の三次会は仲が良かった数名と一緒に居酒屋で飲んでいた。

時間も遅くなり、帰りの電車も終電を残すのみとなっていた。

「結構飲んだな……」

元気はネクタイを緩めながら、言う事の聞かない足を半ば引きずりながら、駅に向かっていった。

身体も暑くなりだるい。脱いだ背広も今はとても重く感じる程だった。

『ピロロロロ』

元気の携帯電話が音を鳴った。

元気はワイシャツの胸ポケットから携帯電話を取り出した。

電話には島田春樹と表示されていた。

「もしもし、春樹か？」

『よお、元気。今日は楽しかったな』

電話の向こうで春樹が言った。

元気と春樹は中学時代からの友人で、先程まで一緒に居酒屋で飲んでいた。

春樹は親の仕事の関係で、中学三年の春頃、転校して行った。

だから今日春樹と会うことを、元気は楽しみにしていた。

そんな春樹は三次会の途中、用事があるからとかで一足先に帰っていったのだった。

「どうした？ 用事があるとか言っただけだったか？」

『まあな。でも、お前とは話したりなくてな。ちょっと話せるか？』

「おう。電車乗るまでなら大丈夫だ」

そう言って、二人は電話で昔話を始めた。

『それにしても、いじめっ子だった元気が、今じゃ教師なんてな』

春樹が言った。彼の言うように、今元気は高校の教師をやっていた。

「いじめっ子って言うなよな。聞こえが悪いぞ」

中学時代、クラスに一人はいるであろういたずら好きの生徒が元気だった。

毎日のように誰かにいたずらをして、その度に教師に怒られていたのを、元氣は春樹の言葉で思い出していた。

『しかし、よくまああんなくだらないいたずらを、毎日毎日考えられたもんだ』

「想像力が人一倍あったと褒めてもらいたいね」

元氣の言葉に、二人は笑い出した。

『あのさ、あれ覚えてる？ お前がやっていたいたずら。背中に何か書いた紙を、こっそり貼り付けるってやつ』

「あ、覚えてる覚えてる！ やったなあ。あれだろ？ 担任の林に『カッラ』って書いて張ったりとか」

中学三年の時、二人のクラスの担任の教師だったのが林先生だった。

彼は生徒の間でカッラではないかと噂になり、元氣がカッラと書かれた紙をこっそり林先生の背中に張ったのだった。

『そうそう！！ あれ傑作だったよな！！ あれで校舎歩いてたんだから、みんな笑い堪えてたの覚えてるよ』

その時の映像が鮮明に思い出される。若かったなと元氣は思った。

『そういえばさ、千葉恵子って覚えてる？』

春樹が言った。元氣はずっと酔いが醒めた気がした。

千葉恵子。その名前を元気が忘れるはずがなかった。

「ああ……三年の時クラス一緒だった。あの眼鏡掛けた静かな子だろ？」

元気が言った。飼育係をやっていて、動物が好きだったのを覚えている。

とても物静かで、男子よりも女子に好かれていた。

『そうそう、その恵子！ 今日も来てなかったな。何か知ってるか？』

「さあな……良く知らないな」

嘘だった。恵子が何故今日姿を現さなかったのか、元気は知っていた。

『そつか。お前、あの子もいじめてたもんな。もしかしたらお前が怖くて来なかったとか……』

「そんな事言っなよ！！」

元気は自分の声に驚いた。冷や汗が止まらない事にも気が付いた。

『そんなムキになるなよ……じゃあ別の話しようか』

「そつだな……ちょっと待って」

急に大声を上げてしまった自分に焦りを感じた。

春樹に聞こえないほど小さく深呼吸し、冷静さを保った。

元気は携帯電話を首と肩で挟むと、ポケットから定期券を取り出した。

改札口の機械にそれを当てると、ピッと音が鳴り、改札が開いた。

「悪い、お待たせ」

携帯を持ち直した元気が言った。

『いいよ。あのさぁ元気。実は俺、今日お前にいたずらを決行したんだ』

「はぁ？」

春樹の急な暴露に、元気は首を傾げた。

『さぁ、俺はお前に何をしたでしょうか？』

元気は電車のホームに向かいながら、自分を探索した。

落書き……は無いな。財布もある。携帯電話は今使ってる。何だ？

『ヒントは電話で話した会話かな』

元気は春樹との会話を思い出した。

教師になったって話をして。いたずらの話をしただろ？ 林先生
の話をして……。

林先生？

そこで元気は何かに気が付き、自分の背中に手を回した。

手に何か触れる物があつた。それが紙だとすぐにわかつた。

「お前、背中に何か付けただろ！！」

『当たり前』

春樹は静かに元気の正解を祝福した。

元気は手を伸ばし、紙を握つた。

引つ張ると簡単に背中から外れた。紙を背中から前に持ってきた。

紙だと思っていたのは新聞紙だつた。でも、ただの新聞紙ではなかつた。

とてもボロボロで、最近の新聞ではないと言つ事を元気は理解した。

「これって……」

その新聞には赤く丸で囲まれた部分があつた。

元気はその部分を見て、恐怖に陥つた。

『元氣、どうした？』

春樹が低い声でそう言った。元氣は何が起こっているのかわからなかった。

「お前……何を知っているんだ！」

元氣は怒鳴った。新聞紙を持つ手が震えているのがわかった。

『何を？ そうだな。お前がやった事全てかな』

元氣は新聞から目を離せなくなっていた。新聞紙にはこう書かれていた。

『中学生女兒校舎で飛び降り自殺』……。

これが誰の事なのか、元氣にはわかっていた。

千葉恵子。元氣と春樹の同級生の女の子の事が記事に載っているんだ。

『その記事。恵子の事だよな。あいつ自殺したんだってな……』

「お前……知ってたのか」

元氣は自分の口内が乾いて気持ち悪かった。

何故春樹がその事を知っているんだ。誰かが言ったのか……。

『本当はお前にチャンスをやろうと思ってた。お前から打ち明けてきたら俺は許すつもりだった』

春樹の声には途轍もない威圧があった。

「待てよ。過去の話だろ！俺だって、まさか自殺するなんて思っ
てなかったんだ！だから俺は悪くないんだ！」

元気は叫んだ。人気の無い電車のホームに声が響き渡った。

『……ここまできて、まだ白を切るのか……』

元気は春樹の言葉に憤怒を感じ取った。元気は悟った。春樹はあの事も知っている。

『お前が……恵子突き落としたんだ』

春樹の言葉に元気は記憶の奥底に閉まっていた悪夢を思い出した。

その日元気は恵子を屋上に呼び出した。

後ろから恵子突き落とすふりをして、そのリアクションを携帯の動画で撮って笑うものになろうと考えていた。

それが全てもの過ちだった。

恵子は元気の想像を遥かに超えて落ちていった。

「あれは事故だった！殺そうとしたんじゃないんだ！俺は悪くない！」

元氣は恐怖のあまり泣いていた。自分は悪くないと自分に言い聞かせた。

「……お前だけは許さない」

その声は電話からではなく、元氣の背後から聞こえた。

元氣が振り向くより先に、背中を誰かに押された。

それが春樹なんだと元氣は感じた。

突き落とされた元氣は線路に身体を打ちつけた。

『ファン！！』

電車が警笛を鳴らした。ホームに電車が入ってきていた。

元氣はもう間に合わないのだと直感した。

ホームに目をやると、春樹が見下すように見ていた。

「お前に呼び出されたとメールがあつた。それが最後のメールだった。俺の全てをお前が奪ったんだ」

元氣は理解した。春樹と恵子は付き合っていたんだ。春樹が転校してからずっと。

「お前はここで終わる。死ね」

■ 永田明美の場合 ■

まただ…。

永田明美は思った。

ここ数日間、電車を降りてから家までの帰路、自分の物とは異なる足音が聞こえる。

今は夜の九時近く。普段から人通りの少なく静かな通りなので、聞き間違えるはずはなかった。

誰かが私の後について来る。

明美は恐怖を覚えながら、ゆっくり後ろを振り返った。

……誰もいない。

勘違いだと自分に言い聞かせながら、明美は家に向かって歩き出す。

こんな事なら、誰かと一緒に帰ってくればよかった。明美は後悔した。

明美は現在高校二年生で、今日は放課後友人達とカラオケに行きたかった。

カラオケで楽しんだ後、友人達はファミレスに向かうと言っていた。

でも明美は一緒には行かなかった。門限が近付いているからだっ
た。

歩いているうちにまた足音が聞こえる。

怖くて歩く速度も徐々に加速していく。

明美は恐怖を振り払うかのように夜道を走り出した。

逃げ込むように家に入る。

鍵を閉め、玄関で息を整える。走ってきたからなのか汗が背中を
流れるのがわかる。

「お帰り」

母親の声が聞こえた。明美は靴を脱ぎ、リビングへ向かっていっ
た。

「遅かったじゃない」

キッチンで皿洗いをしている母親が言った。

「友達とカラオケ行ってきたの。でもまだ九時になってないでしょ」

時計を見た。時刻は八時五十分、門限の九時にはあと十分ある。

「そうだけど、遅くなるなら連絡してね。心配なんだから」

そう言つて、母親はリビングのテーブルに夕飯のカレーライスを持ってきた。

「夕飯まだよね？ 食べなさい」

明美は鞆をソファに置くと、椅子に座り、目の前のカレーを見つめた。

お腹が空いているのに食欲が無い。

「どうしたの？ お腹空いてないの？」

母親が心配そうに言った。明美は今日あった出来事を母親に話した。

「……そう。怖いわね。明日は駅までお父さんに迎えに行ってもらおうか？」

「……いい。大丈夫」

母親の提案を明美は断った。

翌朝、明美がリビングに行くと、スーツ姿の父親が、コーヒーを飲みながら新聞を読んでいた。

明美は無言で冷蔵庫を開け、中から牛乳を取り出し、コップに注いでそれを飲み干した。

「昨日も遅かったみたいだな」

父親が視線をそのままにした状態で、明美に言った。

「門限は守っているから文句無いでしょ」

そう言っただけで明美は、テーブルに並べられた朝食に手をつけず、母親の用意した弁当を持ち、玄関に向かった。

「明美、食べないの？」

母親が心配そうに言った。

「いない」

靴を履きながら明美は返答した。

いつも朝食は食べるようにしているが、父親がいては食欲が失せる。

明美が父親の事を毛嫌いするようになったのは高校に入ってからだった。

今までは優しいと感じていた父親の過保護な部分、お節介に思えてきたのがその原因だった。

門限も父親の命令で、明美は正直うんざりしていた。

「今日は早く帰って来るんだぞ」

明美の機嫌を逆撫でする様に父親が言い放った。

「うるさいな」

そう呟き、明美は家を後にした。

「誰かにつけられている？」

明美は頷いた。

今は昼休み。明美はクラスで一番仲が良い男友達である藤村亮に廊下で相談をしていた。

明美はよく亮に相談を持ちかけていた、勉強の事や友達の事、それに父親の事も。

二人は仲良いだけではない。

実は一週間前、亮の告白に答え、明美と亮は恋人同士になっていた。

ただその関係を知る者は二人を除いて今はいなかった。

亮は小柄な男性で、明美よりも少し背が低い。

体格も細身な方だった。性格は温厚で勉強も出来、クラスではトップクラスの学力を有していた。

明美は昔から亮の優しさに惹かれていたため、告白を受けるのも自然な流れだったように思う。

「大丈夫？ 今日是一緒に帰ろうか？」

心配そうな顔をして、亮が言った。

「え？ でも、亮君の家から遠いでしょ？」

確かに、亮の家は学校から徒歩10分程で着き、明美の家は学校から一番近い駅まで徒歩15分程、電車で5分ほど行った駅で降り、そこから徒歩10分はかかる。

亮の家からはあまりにも遠すぎる。

「大丈夫だよ」

そう言つて、亮は笑った。明美も嬉しくて笑顔になった。

「亮君、ちょっと教えて欲しい事があるんだけど」

クラスメイトの女子学生が亮に声をかけていた。手には数学の教科書を持っている。

「いいよ」

そう言つて、亮は女子学生と一緒に教室へ戻っていった。一度振り返った亮は明美に笑いかけた。

アイコタクトで何が言いたいのか明美にはわかった。

『じゃあ放課後ね』

駅を降りた二人は、昨日と同じ帰路を通って明美の家に向かった。

昨日よりは早い時間だが相変わらず静寂している。

他の道を選ぶことも出来るが、この道が一番の近道だった。

「今日は来てないみたいだね」

背後を見ながら亮が言った。確かに、今日は足音が聞こえない。

それでも明美は落ち着かなかった。

「心配しなくても大丈夫だよ。これからも一緒に帰れる時は僕が一緒に帰ってくれるから」

亮のその言葉を聞き、明美は安堵と同時に喜んだ。

彼氏と一緒に帰れるのだから嬉しくないはずが無い。

亮と色々な話をしながら歩いているうちに、足音の事など忘れて明美は会話を楽しんだ。

「ごめんね、家まで送ってもらっちゃって」

家の前で立ち止まった明美が亮に言った。

「何で謝るの？ 僕は一緒に帰れて嬉しかったよ」

そう言ってまた笑った。明美もつられて笑う。

暫く顔を見合わせた後、明美は家の中に入っていく、ドアの隙間から外を見ると、亮が手を振っていた。

明美もドアが閉まるその瞬間まで手を振っていた。

明美が朝食を食べていると、父親がネクタイを締めながらリビングに入ってきた。

無言でソファに腰を掛け、新聞を読み始めた。

「昨日一緒にいた子は、彼氏か？」

また視線を動かさず、父親が明美に向かって問いかけた。明美は黙って端を下ろした。

「関係ないでしょ」

明美は食器をキッチンの流し台へ持っていき、父親の隣に置かれた鞆を掴み玄関に向かおうとした。

「あの子はやめなさい」

明美の足が止まった。父親の言葉に怒りを覚えた。

「関係ないって言ってるでしょ！！ 黙ってて！！」

そう叫んだ明美はリビングのドアを勢い良く閉めた。

父親が何か後ろから叫んでいたが、今の明美には耳に届かなかった。

「今日も一緒に帰ろうか」

帰りのホーームルームの後、帰り仕度をしている明美に亮が小声で話しかけた。

「ごめん、今日友達と遊んでから帰ることになっちゃったから、先帰ってて」

本当は亮と一緒に帰りたかった。でも友人の誘いを断る事が出来なかった。

明美がすまなそうに謝ると、亮は笑顔を見せた。

「あのさ、帰り怖くなったら電話していい？」

明美が言っと、亮は大きく頷き、また笑った。

まさかこんな遅くなってしまうとは思わなかった。

友達と盛り上がっていたら時間を忘れてしまっていた。

駅を降りたときには、すでに9時を回っていた。

明美は携帯の時計を確認した後、いつもよりも早いペースで歩き始めた。

暫く歩いた所で、またあの音が聞こえた。

足音。背後から足音が聞こえる。

明美は耳を澄ませながら自分の足音を限りなく小さくするよう心がけて歩いた。

足音。やっぱり足音が聞こえる。聞き間違いじゃない。

心臓の鼓動が早くなっている事に明美は気が付いた。怖かった。

明美は暫く考えながら決意した。明美は勢い良く振り返った。

「……！」

後ろには、黒いロングコートを羽織り、ニット帽を被った人物が立っていた。

それが足音の主だとすぐにわかった。

逃げなきゃ。明美の本能がそう告げていた。

明美は無我夢中で走り出した。

後ろを見ると、ロングコートの人物も追いかけてきていた。

明美は恐怖で泣きそうになりながら走り続けた。

走って走って、とにかくロングコートの人物に追いつかれないように走った。

暫く行くと公園が目の前に現れた。

明美は公園の中に入り、草むらに身を隠した。

入り口の方に目をやると、ロングコートの人物が当たりを見回しながら公園に侵入してきた。

明美は慌てて姿勢を低くした。見つからないように。明美はそう祈った。

明美は何か思い出したように鞆から携帯電話を取り出した。

携帯を開き、メモリから亮の名前を見つけ出す。

発信ボタンを押し、亮の声を待った。

しかし、亮は電話に出なかった。

電話するって言ったのに。明美は切なくて、寂しくて、怖くて涙が出てきていた。

この公園は明美の家からそう離れていない場所に位置している。

幼い頃明美はこの場所でよく遊んでいた。

そして、空が暗くなると、父親が迎えに来てくれたことを思い出していた。

明美は携帯のメモリから、父親の番号を見つけ出し、発信ボタンを押していた。

あんなに嫌いな父親でも、きっと自分を助けに来てくれる。明美はその時そう信じていた。

『プルプルプル』

『ピピピピピピピ』

明美の耳に呼び出し音が聞こえたその瞬間、携帯の着信音が聞こえた。

聞き覚えのある無機質な着信音。それは父親の携帯電話の音であった。

明美は何が起こったかわからなかった。

いや、少しは気が付いていたのかもしれない。

ゆっくり立ち上がり、草むらから顔を出した。

目の前にロングコートの人物が立っていた。

その人物のポケットの中から、その着信音が聞こえた。

「明美……」

ロングコートの人物が小声でそう言った。その刹那。

『ゴンッ』

鈍い音がして、ロングコートの男の身体が地面に叩きつけられた。

驚いた明美が見たのは、鉄パイプを持った亮の姿だった。

今までに見たことが無いような真剣な表情で鉄パイプを握り締め、明美の顔を見ている。

「大丈夫!？」

鉄パイプを地面に投げ捨て、亮は明美の肩を握った。

明美は恐怖で混乱していた。

何があったのか理解できず、気が付くと亮を抱きしめて泣いていた。

「無事で良かった」

亮はそう言って、明美の頭を撫でた。

暫くして、明美は亮から離れると、確認をするため地面に倒れているロングコートの人物に近付いた。

ニット帽で顔が見えにくい。明美は自分の予想を覆したかった。

だからこそ、その人物のニット帽を取った。

しかし残酷にも明美の予想は現実だった。

倒れているその人物は、明美の父親だった。

亮に殴られた場所から血が出ているが、気絶しているだけのよう
だ。

明美は泣き崩れた。やり場の無い気持ちをどこへ向ければいいか
わからなかった。

ただただ泣いた。

ここ数日明美の背後から追ってきていた足音の犯人が、自分の父
親なんて

……今のこの気持ちが怒りなのか悲しみなのか、明美自身にもわ
からなかった。

「明美ちゃん、とにかく家に行こう。送るから」

そう言っ
て亮は明美の腕を取った。

「でも……」

「大丈夫。お父さんは僕に任せて」

そう言って、亮は笑顔を見せた。でもその笑顔が今の明美には恐ろしく思えた。

「どうして？」

「え？」

明美は顔を俯かせた。亮の握った腕を振り払い、ゆっくり立ち上がった。

次に顔を上げたときには、明美の表情は恐怖で歪んでいた。

「どうして、この人が私のお父さんだって知っているの？」

そうだった。亮は明美の父親に会ったことは無かったはずだった。

なのに亮はそれを知っていた。明美はその事に気が付いたのだった。

「何でって……僕会った事あるもん」

その返答に明美は驚いた。

「明美ちゃんの家の前まで行った時、声掛けられたんだ。だから知ってる」

家の前まで？ 明美は思い出した。

「昨日？」

「違うよ」

亮は即答した。

「もつと前。ずっとずっと前」

明美は理解が出来なかった。明美の表情とは反比例して亮の顔は笑顔だった。

「高校入って、明美ちゃんに一目惚れして、それからずっと、明美ちゃんを帰るのを見ていたんだ。そんな時お父さんに声掛けられたんだ。娘に近付くなんて」

明美は理解し背筋が凍った。目の前にいる彼は、昔から明美のストーカーだった。

今になって、父親の言葉が脳裏を過ぎる。

『あの子はやめなさい』

明美は今この時が夢であってほしいと本気で願った。願う事の無い祈りを信じたかった。

「多分、僕と明美ちゃんが付き合った事に気が付いたんじゃないかな。その日から、明美ちゃんの後をお父さんがつけるようになったんだ。だから僕はいつも警戒していたんだよ。何かあったら助けられるようにそんなもん持ってたね」

亮の指差した先には父親を殴った鉄パイプが転がっていた。

多分父親はストーカーから明美を守るために、後ろにいたんだ。

ずっと後ろにいたストーカーには気が付かなかったのに、自分を守ろうとした父親に恐れるなんて。

今思えば、門限を決めたのもストーカーから守るための事だったのかも知れない。

馬鹿だ。明美は自分を責めた。あれはお節介じゃない。優しさだったのに。

「大丈夫だよ。安心して。明美ちゃんお父さんの事嫌いなんですよ？ 僕も明美ちゃんとの仲を引き裂こうとするこの人が嫌いなんだ。だから任して」

そう言って、亮は明美に微笑んだ。

きつと彼はこれが正しい事だと思っているんだと思う。

だからこんなにも綺麗な笑顔をするんだ。明美の身体は震え、何も出来なかった。

「ちゃんと殺すから」

亮は優しく明美に呟いた。

■秋田誠の場合■

「ありがとうございます」

そう言って、誠は後部座席のドアを開けた。

スーツの女性は軽く会釈をし、車から降りた。

ドアを閉めると、誠は運転席と助手席との間を見つめた。

そこには窪みがあり、そこにお金に乗っている。

「ワンメーターくらいでタクシー使うなよ」

誠は溜息を吐きながら置いてあったお金を握り締めた。

誠がこの仕事を始めてから、一年くらい経過しただろうか。

二年前、当時働いていた会社でリストラに遭い、三十五歳で再就職先を探し、今のタクシー運転手になった。

この業界も不景気で、前の会社の二分の一程の給料しかもらえなかった。

歩合制で乗せた客の支払いが良ければもっと多くの給料をもらえることもあるが、基本そんなもんだ。

次の客を探すため、道路を走っていると、黒い革ジャンを着た男性が道端で手を挙げていた。

誠はその男性の目の前に車を止めると、後部座席のドアを開けた。

男性は無言で腰を掛けると、じっと窓の外を見ていた。

「お客さん、どちらまで？」

誠がバックミラー越しに男性を見た。男性は顔をゆっくり前に向けて、誠の視線に合わせた。

「行きたい場所の住所わからないんです。とりあえず、このままつづく」

生気の無いような小さな声で、男性はそうお願いした。

誠は言われるがまま、車を走らせた。

暫くの間沈黙。男性はまた窓の外を見ている。

無表情、無気力。その男性を表現するとそんな感じだった。

誠は何も言わず、ただ黙って車を走らせた。

「お客さん。どこに行きたいんですか？」

5分ほど走った頃、沈黙に耐えられず、誠が聞いた。

バックミラーを見ていると、男性がまたゆっくり顔を前に向け、フロントガラスより先を注視した。

「まだまつすぐです」

誠は少し気味が悪いなと思った。でも仕事は仕事。誠は車を走らせる事に専念した。

「運転手さん……」

次に言葉を発したのは、以外にも男性だった。誠はバックミラーで男性の顔を見た。

男性も誠を見ている。

「人生に絶望した事……あります？」

突拍子も無いその質問に、誠は啞然とした。

急に何を言い出すのだろうか。ますます気味が悪く思った。

でもまた沈黙になるのも怖かったので、誠は話に乗る事にした。

「そりゃありますよ。こんな人生楽しくないって何度思った事か……」

誠の素直なその言葉に、男性は少し微笑んだ。こんな表情も出来るのだと誠は思った。

信号が赤になり、車を停車させると、後ろの男性が、身体を前に乗り出してきた。

運転席と助手席の間に顔を出し、両腕をそれぞれのシート後ろに

回した。

「僕は今、この世界に絶望しています」

今まで以上に低い声で、男性はそう言った。

誠はその言葉に少し恐怖を感じた。

顔はすぐ横にあるのだが、そちらに顔を向けるのが怖かった。まるで悪魔の呟きのように。

「こんな世界無くなってしまえばいいと、僕は思っているんですよ」

男が言った。誠は恐る恐るバックミラーを見た。

男は笑っていた。いや、正確には口元だけ笑っていた。

目は深淵のように暗く底が見えないほどだった。

何を考えているのか、その表情からは微塵も理解できない。

「運転手さん。僕はね、人生がつまらなくなった。だから今からちよつとしたゲームをしようと思ってるのさ」

男の言葉が誠の動揺を誘った。

ゲーム……何を言っているのだろうか。誠は恐怖に怯えていた。

「運転手さん、このまままっすぐ進んで」

誠は正面を見た。誠が運転する車は、まっすぐ進んでいく。

何故だろうか、こんな時に限って、信号で止まる事すらない。誠はハンドルを握り締めた。

「簡単なゲームさ。運転手さん、このゲームに参加してくれるよね？」

誠の身体が一瞬にして強張った。

誠の米神に冷たいものが触れたからだ。

それが何なのか、誠はバックミラーで確認していた。

後ろに座った男が、拳銃を握り締め、その銃口を誠の米神に押し当てていた。

「お……お客さん……ご冗談を……」

「冗談？ 僕は冗談なんて言わないよ。僕はいつだって本気さ。試してみるかい？」

ゆつくりと男の指が引き金に伸びた。

誠は慌てて首を振った。男の目は真剣だった。誠は悟った、この拳銃は本物だと。

「運転手さん、あなたは物分りが良くていい。ゲーム、参加してくれるよね」

誠は頷いた。頷く事しか出来なかった。

「簡単なルールさ。運転手さん、あの先に何かがあるかわかるかい？」

男は顎先で窓の外を示した。道の先には、道の両端に巨大な倉庫が並ぶ埠頭が見える。

「運転手さんは、このまま真っ直ぐタクシーを走らせてくれればいいだけさ」

誠は耳を疑った。誠はこの道が続く先に何かがあるのか知っている。それは海だ。

「気づいているようだね。そう、この先の海まで行ってくればそれでいい。真っ直ぐ、止まる事も無く。ただ真っ直ぐ」

銃口を頭に突き付けられたまま、誠はどうする事も出来ずアクセルを踏み続けた。

何故俺が？ 質問しても誰も答えてはくれない。

このまま自分がどうなるのか。考えただけで寒気がする。

誠は背後で微笑む狂気の言葉を待った。

「運転手さん。いいかい？ 一度でもブレーキを踏んだら、運転手さんの負けさ。僕はこの銃の引き金を引く。ブレーキを最後まで踏まなかったら、運転手さんの勝ち。助かる事もあるかもしれないが、きっと二人で死ぬ。つまり、一人で死ぬか、二人で死ぬか。そんなゲームさ」

ルールを聞き、誠は理解した。自分は殺される。選択肢の中に、自分の生きる道がないと。

「僕にとっては逆さ。運転手さんがブレーキを踏んだら僕の勝ち。僕は生き残る。でもブレーキを踏まなかったら、自分も死ぬかもしれない。危険なゲームさ。もし僕が勝てれば、少しでも絶望から解放されるんじゃないか。僕はそう思うんだよね」

あまりにも理不尽なゲーム内容に、誠は憎悪を感じた。

でもどうする事も出来ない。逆らったら、それだけで死。

誠にはそれが理解できた。

どうしてこの男はこんな事を決行しているのか。わからない。

誠は自分の命の軽さに嘆くことしか出来なかった。

「さあ、もう少しで、海に辿り着く。わくわくするじゃないか」

男は笑った。誠は体中の血流を感じ身体が暑くなった。

死ぬ。

今までに決して感じることの無かった恐怖に、心が乱れた。

混乱で自分の思考すら感じられない。

アクセルを踏む足に力が入り、自然とスピードが上がっていく。

何個も並ぶ倉庫の前を通り過ぎる。

ゆっくりと視界が開けてくる。眼前に見える広い海が、誠の目に
焼きついていく。

「どうする？ 運転手さん」

男が呟く。誠の心に迷いが生じる。

どうすれば助かる？ どうやっても助からない。

心の中で二つの言葉が衝突した。

生きたい。

きっと今までの人生で一度も感じたことのないもう一つの気持ち
の発生に、誠は涙した。

海が太陽の光を反射させ輝いている。

その海に向かって、誠の車が進む。

車の走る道の先に、道が無くなり海になっている。

きっとこのまま飛び込んだら、この車は沈み、海の藻屑となる。

沈むまでに外に出れば、きっと助かるが、後部座席に座る男が
それを許してくれるはずが無い。

誠は数秒後起きるであろう未来を想像した。

「どうする？」

また男が呟いた。心なしかさつきよりも興奮しているように感じる。

アクセルを踏み込む。音を立てて車がスピードを上げる。誠は目の前に迫る海に恐怖した。

「どうする！」

男のが叫んだ。誠は目を瞑った。

それと同時に、無意識のうちにブレーキを踏んでしまっていた。

耳鳴りがするほどの甲高い音が響いた。

ブレーキを踏んだにも関わらず、車は進んだ。

ゆっくり車体が止まった。

誠はゆっくり目を見開いた。

目の前には道路が無い。ただ海だけが広がっていた。車が海に飛び込む事は免れたようだ。

しかし誠には安堵は訪れなかった。

ブレーキを踏む。それを意味するものが、誠の死だったからだ。

「ブレーキ踏んだね」

男が言った。誠の背筋が凍り付いた。バックミラーを見ると誠は男と目があつた。

殺意に満ちた男の目が、誠が視線を外す事を許さなかった。

「残念だったね。運転手さんの負けだよ」

そう言って、男の握った拳銃が誠の米神に食い込んでいく。

誠は自分の死を悟り、目を瞑った。

暫くの沈黙の後、笑い声が聞こえた。

誠が振り向くと、男が腹を抱えて笑っている。

誠には何が起こったのか理解できなかった。何故彼が笑っているのか謎だった。

暫く笑い続けた男が、ゆっくり誠に微笑みかけた。

誠は男の次の言葉が想像できなかった。

「冗談だよ」

「冗談……？」 誠は混乱する思考でその意味を理解しようとした。

男はまた笑い出す。

冗談……冗談だったのか。誠の身体中から滝のような汗が出始めた。

大きな溜息を吐き、心臓の鼓動を確かめるかのように胸を握った。
生きている。

自分は生きている。

そう思った瞬間、安堵した。本来なら男を恨む。

でも誠にとってそんなことどうでも良かった。今生きている。その実感だけで十分だった。

「お客さん！ 冗談きついで！」

誠は笑いながら言った。男も笑いながら続けた。

「ごめんね！」

良かった。誠は心からそう感じた。正面に身体を向き直し、目の前に広がる海を見つめた。

さっきと変わらないはずなのに、今見る海は、さっきよりも綺麗に見えた。

輝いて見える。広く見える。そして……赤く見えた。

違った。海が赤いんじゃない。フロントガラスが赤く染まってい

た。

誠は目を擦った。見間違えじゃない。それに頭から何か水滴が垂れてきたのに気が付いた。

手で触るとぬめつとした。ゆっくり顔の前に持ってくると、指先が赤く染まっていた。

青ざめた顔で、誠はバックミラーを見た。

後部座席で男はまだ笑っていた。

笑顔で銃を握り締め、銃口を前に向けている。

銃の先差から、薄っすらと煙が上がっているのも見える。

何が起きたのか理解できぬまま、誠の意識が遠くなっていた。

「冗談さ……最初から、運転手さんだけ死んでもらう予定だったのさ」

■ ○ ○ ○ ○ の場合 ■

読み終わった小説を机の上に置いた。

強張っていた身体を伸ばし、少し唸った。

気が付けばもう深夜帯だ。

窓の外も暗くなっている。机の上を照らすスタンドライトも、一段と明るく感じる。

改めて小説の表紙を見た。題名通りの小説だった。そう単純に思った。

話の内容も単純だ。

主人公が替わっていく短編小説で、それぞれが体験した恐怖体験が描かれていくミステリーだった。

読み終わったばかりの小説を思い出し、目を瞑った。

そういえば……ある疑問を感じ、再度小説を開いた。

読んでいる途中に気が付いたのだが、主人公七人の苗字に共通点があった。

それが気になっていたのだ。

そこに何か隠されているのでは？ 直感でそう感じた。

一人一人の苗字を確認した。

それだけじゃわからなかったので、引き出しから出したノートに、それぞれの苗字を書いていく。

やっぱり共通点はあった。でも何も隠れているように感じない。

気のせいだろうか。

それでも何か気になって、何気なく苗字をひらがなに変換して新たに書いていってみた。

何も見つからない。

試しにひらがなにした苗字の頭文字を並べて読んでみた。

でも何も無かった。

気のせいだったのか。

頭に両腕を回し、天井を見た。そして、もう一度、小説を思い返してみた。

……そうだ。そうだった。苗字以外に、共通点があった。

そう思い、改めて自分で書いたひらがなを見つめなおした。

そう、小説の題名。この小説は題名が表す通り、それぞれの物語は後ろや背後に関係する恐怖体験を描いていた。

だからこの苗字の頭文字を後ろから読んだら……。

謎に気が付いた。

その瞬間恐怖を感じた。

そして、知ってしまった事に後悔した。

急に自分の背後に気配を感じた。

振り向くのが怖かった。

振り向いたら、自分自身がこの小説の主人公達と同じ結末を歩むように感じた。

恐怖を拭い去るように頭を振った。

そしてゆっくり後ろを振り向いた。

完

■ ○ ○ ○ ○ の場合 ■ (後書き)

最終話に出てくる小説は、この小説です。

だから主人公は…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4835t/>

うしろ

2011年7月6日13時54分発行